

ブルビチャチュ世界初登頂 42周年-登山文化は今・・・

OWCC 中川和道 20240118

ブルビチャチュPhurbi Chyachuとは、ネパール語で「東方のこうもり」。首都カトマンズの丘に登ると、東の方角に、この山が、こうもりが羽を広げた姿で見えるらしい。何ともいい名ではないか。ヒマラヤはサンスクリット語で「雪の住み家」。「神々の御座」との呼び名もあり、登山文化の豊かさをひしひしと感ずる。

そのブルビチャチュに、安田一郎隊長以下19名の労山大阪府連-ネパール登山協会隊が世界初登頂を果たしたのは、今から42年前、1982年5月1日(第1次隊7名)と5月3日(第2次隊9名)のことだ[1,2]。勤労者の社会参加が進み、労山が生まれたのが1960年。右肩上がりの登山ブームを追い風に、労山大阪府連隊の初の高所登山[3]はハンチントン(カナダ 3731m) 西壁のクライミング。織田博志隊長他3名がアルパインスタイルにより2ビバークの末、完登した。織田は1981年のチョー・オユー8201mに全国連盟・ネパール合同隊(小松猛隊長)に参加。大阪労山から初の8000m峰登山への参加となった。1977年全国連盟ナンダデヴィ7816m登山隊に吹田労山の槌田洋が参加、1978年全国連盟のガネッシュヒマールIV峰(パビール7102m 吉尾弘隊長)に大阪労山からは安田、鈴木、下地の3名が参加。ネパール人を単なる使用人としてではなく対等平等の合同登山隊として登らんとする労山全国隊のその気運は大阪労山に根づき、1982年のこのブルビチャチュ世界初登頂に脈々と流れつき合同隊の結成に至ったと、安田は語る。

8000m峰は商売になる。早朝暗いうちから固定ロープを張るのは、大量雇用されたネパール人である。アルパインクライミングの偉大な課題「8000m峰の冬季初登頂」では、そのあまりにも膨大な苦労や貢献にもかかわらず、ネパール人が登頂メンバーに選ばれたことはこれまでなかったと、近藤和美は語る[4]。少なからぬ人々が嬉しく感じたのは、最後まで難攻不落を誇っていたK2冬季初登が、2021年1月16日に、ネパール人隊によってなされたことだ[4]。中川もこれは嬉しかった。何しろ、ニルマル・ブルジャという逸材がいる。彼は2019年、わずか半年で8000m峰14座を登ってしまったのだ。「ネパール人登山家の自立」、これは登山文化の新しい側面として楽しみで、この時代に生きておられる幸せを感じる。

42周年記念集会は、府連の第62回総会3月10日(国労会館)に引き続いて15時から開催される(次ページのポスター参照)。集会では、隊員トークに先立って、近藤和美氏が記念講演「高所登山-これまでとこれから」を行う。8000m峰9座に登頂した近藤氏は、これまで数百人もの登山者を導いて高所を駆け巡ってきた。その体験を縦横に語ってくれればと期待が高まる。

1982年ブルビチャチュ隊は、半年で1000km走ったメンバーが3人、登山期間2か月で物資は3.5トン。教育委員会から推薦をもらい現地で学校交流、卸売り市場のおっちゃんに1万円カンパくれてがんばれ!とか。吹雪の中でカメラを開けてネガフィルムを詰め替えての撮影。8ミリ映写機も回したんかい? 蒼い氷にピッケルをはじかれながらのカッティング。4000m固定ロープを自身でセット。スノーバー100本ハーケン100枚・・・おもしろい話に湧きそうで、今から楽しみだ。

[1]大阪府勤労者山岳連盟-ネパール登山協会合同登山隊『ブルビチャチュの蒼い氷』、1984年8月。

[2]大阪府勤労者山岳連盟隊「ブルビチャチュ登頂の記録」、『山と仲間』1982年8月号。

[3]大阪府勤労者山岳連盟ホームページから「海外登山」ページの「大阪労山における海外登山50年史」を参照。安田一郎が前半のもと原稿を書き、林孝治が完成させたという。

[4]近藤和美「機を見るに敏!ネパール隊 投機未踏のK2速攻 無酸素登頂者も!」、『登山時報』2021年5月号。